

大人のための 歯科講座

（歯科治療の新潮流）

＝②＝

歯科疾患そのもので命を落とすようなことはほぼないと言えますが、なかなか完全に治癒しないという特徴を持っています。

例えばインフルエンザや風邪、軽いケガなどは治ればそれからその病氣と付き合っていくということはありません。しかし糖尿病や高血圧などは薬で状態

は基本的には戻ってきません。歯を失って、インプラントで噛めるという機能は回復できても元の歯があった時とは違うのです。元の歯のようにかめるとい

うところまでです。慢性疾患というのは、症状が劇的ではないため予防も難しく、完全治癒しないため、それに対する患者さん

数本失った場合は、入れ歯、ブリッジ、インプラントなど治療法に選択肢があり、極端な話、放置しておくことも可能なのです。

ルーセントデンタル
クリニック 副院長
後藤 英夫



＜略歴＞ 1988年、東京医科大学歯学部歯学部卒業。名古屋大学医学部遺伝子再生医療センター医員、国立長寿医療センター歯科口腔外科勤務などを経て、2008年からルーセントデンタルクリニック副院長。

歯科への価値観の多様性

を良くすることほどこでも、完全に治ることはありませ

医師とのすれ違い “慢性疾患”に起因

を良くすることほどこでも、完全に治ることはありませ

の思いにも多様性があるのです。また治療法にも選択肢があります。がんなどの疾患は治療法にあまり患者の選択の余地がありません。しかし例えば歯を

私たち歯科医師は職業柄どうしても技術論に終始してしまいがちですが、長く患者さんとかかわるといことを認識し、治療が形上終わったとしてもそれ

が治癒を意味するものではないことを理解しておく必要があります。口腔内の環境は過酷で、治療しても数年すれば必ず変化してきます。それに柔軟に対応していかねばいけません。そういう意味で、歯科において完璧な治療などあり得ないのです。その時点で最良と思われる治療法はありますが、その方法も一つではありません。患者さんにもそのような特徴を理解してもらい、歯科医師とよく相談しながら治療をすすめる、また終了後もメンテナンスという形で付き合っていく必要があるのです。

歯科医師と患者さんのすれ違いはこのように疾患の特徴にも起因しているように思えます。

虫歯で歯を削った後、かぶせものをしたり、詰め物をしたりしますが、これも厳密に言えば、歯がもとに完全に戻った訳ではなく、別の材料で置換しているのです。歯周病で骨を失えば、その骨

歯の根の代わりにチタンの棒を骨に埋め込み、その上に歯をかぶせていく方法



インプラント

失った歯の両側の歯を削り、冠を橋渡しすることによって失った歯を補う方法



ブリッジ

失った歯の周囲の歯に金属の留め金をつけて、取り外し可能な人工の歯を留める方法



入れ歯

2本歯を失った場合の治療法を例にとってもインプラント、ブリッジ、義歯と3通りの治療法があり、それぞれに利点、欠点がある。歯科医師と患者が双方話し合った上で、どの方法でいくか選択する。

ルーセントデンタル
クリニック 名古屋市
西区牛島町6の1・名
古屋ルーセントタワー
3階、052-9008・
8555、URL
www.lucsent-d.com